



作家・ドイツ在住 川口マーン恵美

カンナビス合法化

2月23日、ドイツ連邦議会(下院にあたる)は、長らく加熱していた大麻の合法化法案を、賛成407、反対226、棄権4でついに可決した。これが3月22日に連邦参議院を通れば、ドイツでは4月1日から、大麻の販売、栽培、吸引が、制限付きではあるが合法化されることになる。

大麻はカンナビス、あるいはマリファナとも呼ばれ、オランダのアムステルダムではその吸引は合法。販売が許可されている多くの“コーヒーショップ”では、世界中から詰めかけた観光客が、コーヒーを飲みながら興味半分で大麻を吸っている。夏などテラスにもテーブルが並んでいるので、店の前を通るとちょっと異様な匂いがしたが、その匂いは公園などからもよく漂ってきた。

ところが23年5月以来、アムステルダムの大麻は、公園や街角など公共の場所からは締め出された。健康上の問題、治安の悪化などがあまりにも深刻になっていたからだろう。ただし、コーヒーショップでの吸引は今も認められている。

一方ドイツでは、医療用以外の麻薬は禁止だが、実際には安価で軽い合成ドラッグ、たとえば「エクスタシー」などは簡単に手に入る。若者がディスコに行く前などに気軽に服用するのでパーティードラッグと呼ばれるが、元々が違法なので品質管理などなく、時に不良品や過剰摂取などで深刻な事故が起こった。

本物の麻薬である大麻、さらに危険なコカイン

もかなり出回っているが、その密輸・密売には国際犯罪組織が関わっている。麻薬は言うまでもなく世界的な巨大ビジネスだ。その結果、米国を始め、多くの西側先進国では麻薬がまん延してしまっているが、日本だけが例外的に防波堤を築けている。この稀有な状態をどうにかして死守すべきだと、私は常々強く思っている。

メリットばかりが強調

ところが、ドイツ政府はそういう事例を無視し、今ごろ嗜好用の大麻自由化を進めようとしている。それを力強く推進しているのが社民党のラウターバハ保健相。エネルギー高騰や、無制限の難民受け入れ、景気の悪化が国民を追い詰め始めている今、これで国民の気分をハイにしようと思っているのか、大麻解禁とは恐れ入る。議会でそのメリットばかりを強調する氏の姿は、私には異常に見えた。

氏の主張では、まず、合法化によって闇市場が消えるので、密輸ルートをつぶすことができる。また、大麻の品質や価格、最大購入量の設定により、犯罪や吸引の際のリスクが減る。その結果、警察は麻薬摘発の任務から、また裁判所は麻薬関係の訴訟から解放され、他の仕事に尽力できるようになる。それどころか、麻薬販売を合法化すれば付加価値税(消費税)を課せるので税収が増えるという論理には、心底驚いた。

そして、これらの目的のために、合法に栽培された大麻を販売する「カンナビス・クラブ」が設置される。そこで購入できる最大量は、22歳